

放送人句会マニュアル

2018年4月現在

放送人の会理事

深尾隆一 記

はじめに

放送人の会では、会員相互の交流を深める為に俳句の会を開いております。主旨からして会員であれば誰でも参加出来ます。ただ俳句という文芸の性格上、句会には若干の予備知識と準備が必要となります。本稿は初めての方を念頭にマニュアルとして記しました。「句会」は何となく敷居が高い、なかなか参加しにくい、とお考えの方、是非ご一読下さい。

会の概要

隔月に1回（年6回）、第二水曜日開催が基本ですが、曜日は変更されることもあります。2017年12月現在で66回、ざっと11年を数えております。幹事は放送人の会監事の西川章氏です。また選者として年に3回、俳人の星野高士氏が出席されます。毎回概ね10名前後が参加しています。会場は赤坂の居酒屋「麦屋」です。

会は17時半頃から参加者が集まり、18時半に投稿（自作句の提出）を締切り、20時半頃にお開きとなります。この間後述の句会の段取りが進みますが、同時に食事とお酒と会話を楽しむという趣向です。費用は飲食代も含めて6,000円から7,000円で当日徴収します。

句会の成果は毎回会報としてメールで参加者に送られます。また放送人の会の会報にも掲載されます。

事前に用意すること

毎回兼題（予め決めた題）が出されています。季語から三題、業界用語から一題です。初めての方は幹事に次回の兼題をお確かめください。この四題ひとつひとつで数句ずつ作句するのが理想ですが、取り組みやすい題から始めても結構です。

各自はこの兼題に従って合計7句を作句します。ここで季語に関する知識が必要となります。俳句が初めての方は季語集等を書店でお求めになるようお願いします。業界用語を題とするのは当句会独自の趣向で、

放送人ならではの数々の秀作が生まれています。例えば

特番の晴着のまんま忘年会 慶人 (2017年12月)

面倒といえ、出された業界用語は基本的に季語を含みませんから、それを織り込んで作句しなくてははいけません。上の句で言えば、予め出された業界用語は「特番」、季語は「忘年会」です。

出来れば多めに作句して、句会当日の締切ぎりぎりまで推敲し選び抜き7句にするのが良いでしょう。

句会当日の段取り

① 投句

各自自作の句を短冊1枚に1句ずつ書いて出します。短冊は会が用意しています。筆記具は何でも構いません。無記名です。締切時間は前述の様に18時半です。つまり、事前に用意が出来ていれば、短冊に書き込む時間の余裕をみて18時半ぎりぎりにも出席しても良い、ということです。現役で多忙の方にお勧めします。

② 清記

全員の投句が終わったところで幹事が短冊を集め並べ替えます。そして改めて各自に7枚(7句)ずつ配布します。それぞれは事前に幹事が配布したA4の白紙(用紙を横向きにして右から縦書き)に7句を書き写します。これを清記といいます。この時、幹事もしくは星野先生出席の時は先生から番号を呼ばわれます。幹事の左隣に座った人は2番、次の人は3番、という具合です。この番号をそれぞれの清記用紙の右肩に書いておきます。書き写した短冊は無用となるので、ひとまとめに丸めても結構。

こうして清記することによって、筆跡も含め作品の匿名性が保たれます。どの句が誰の句か分からなくする、ということです。先生の句も同様です。

③ 選句

次は自分の気に入った句を選びます。この時点で手元には自分が清記した用紙があります。まずその中から吟味します。ここで注意すべきは、自分の句は選んではいけないということ。気に入った句があれば幹事が事前に配布してあるもう1枚の用紙に書き取っていきます。(これも用紙

を横向きにして右から縦書き。) 気に入った句が沢山あるかも知れないのでスペースに余裕を持って下さい。書き写し終わったら清記用紙を右隣の人に渡します。つまり自分の左隣の人からは自分に渡されるということです。そこでまた選句します。こうして最初に自分が清記した用紙が一巡して戻ったら選句第一段階終了です。

次に選句を7句に絞り込みます。その中から最も気に入った1句を特選とします。書き写した中から6句に○印をつけ、特選句に◎をつけるという方法と、別途白紙に7句のみを更に書き写すという方法があります。どちらでも結構です。

④ 披講 (選句した作品の読み上げ)

全員が選句を終えた頃合いを見計らって、いよいよそれぞれが選句した句を発表します。この時点で清記用紙は幹事が回収します。

披講は幹事(あるいは先生)の右隣から始めます。各自が選句した句を順に読み上げていきます。

まず、自分が披講する順番でない時の心得。

ここで重要なのは自分の作品が読み上げられたら即座に名前を名乗ること。その為にはよく聞いていなければなりません。また、自分の選句した句と同様の句が読み上げられ、その作者が名乗った時は、自分の選句用紙にも作者名を記しておくこと。

次に自分が披講する時の心得。

まず自分の名を名乗り(「深尾選」という具合)、特選以外の6句を読み上げていきます。ここで重要なのはなるべく読み間違いや言いよどみをしないこと。作者に対する礼儀です。読み上げるとその作者が名乗りますから、選句に名前を記しておきます。これは必須です。最後に「特選」と断って一番気に入った句を読み上げ、その句を特選とした理由を説明します。1分位でしょうか。

以上を順番に続け、最後に幹事あるいは先生が披講します。これで句会の基本部分は終了です。ここで各自の選句用紙を幹事が回収します。会報作成に必要となります。持ち帰りたい人は、別途書き写しておいて下さい。

⑤ 次回の兼題を決める

次回の開催日の確認とともに、幹事の指名により4人の参加者が次回

の兼題を決めます。一人一題です。ここでも季語の知識が必要となります。手元に季語集等を用意しておきましょう。業界用語も決めますが、こちらは職業柄、経験上いくらかでも出てきますね。次回の題を決め、しばし歓談し、幹事の会費取りまとめをもって句会はお開きとなります。

⑥ その他

俳句は出来たが当日どうしても出席出来ない、という場合もあるでしょう。その場合は「不在投句」ということも出来ます。出席確実な人にメール等で託す、というわけです。蛇足ながら出席者はこの時不在投句の人の分も含めて、一人7句ではなく8~9句清記する必要がありますが、それぞれが作句するのはあくまで7句、選句するのもあくまで7句であることに変わりはありません。また不在投句した人の句が選句された場合、誰かが名乗りを上げなくてはなりません。託された方がしっかりと把握しておいて名乗る、というのが基本です。

おわりに

個人的な感想になりますが、句会の醍醐味は「静かな盛り上がり」である、と思っています。料理に酒、となると活発な議論が展開され。次第に音量も上がっていくのが普通であり、それが無いと「テンションが低い」となりますが、句会の場合投句から清記、選句に至るまでは各自が内に閉じこもって無口でいても一向に構わない。それでいて会自体の緊張感はしっかり感じられるのです。まさに静かな盛り上がりです。そして披講が終わる頃になると談論風発、一気に開放感に浸ることが出来ます。

さらに素晴らしいのは、俳句を通じて放送人の皆さんの多才な個性や人となり、多彩な経験に触れることが出来る場でもあるという点です。俳句は自ずとそれらが滲み出してくる文芸です。まさに放送人の会の主旨でもある会員の交流という点では実に有意義であると思います。

大勢の会員の方の参加を乞い願う次第です。

以上